

霊宝館だより

題字・畚野光義師



弘法大師空海が奥之院で入定する様子を描いた「入定弘法大師像」(金剛峯寺) 冬期平常展にて出陳中

霊宝館だより 第121号

平成29年2月23日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

公益財団法人高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話07336-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■ 開館時間	11月1日～4月30日 8時30分～17時00分	■ 拝観料	大人 600円 高・大学生 350円 小・中学生 250円
■ 休館日	5月1日～10月31日 8時30分～17時30分 年末年始のみ	■ 高野町に住居がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。	■ 専用駐車場あり

平常展

「密教の美術」

開催中～4月9日(日)まで

第121号 目次

平常展のご案内	2～3
収蔵品の紹介95	4
高野山の古建築 第二十五回	5
高野山の考古学(十三)	6～7
古絵図で巡る高野山探訪(その三)	8～10
高野山霊宝館からのご案内	11
霊宝館の庭園	12

毎月21日(弘法大師の日)ご来館の方にプレゼントあり! ホームページ割引券もご利用ください

冬期平常展

「密教の美術」開催中 四月九日(日)まで



嵯峨天皇像



重文 紺紙金字一切経(荒川経)

高野山には弘法大師空海が開創して以来、約千二百年の歴史があります。その歴史は高野山のみで成り立っているのではなく、様々な人々との関わりの中で紡がれてきました。

今回の平常展では、高野山に伝わる文化財を通して、高野山に係った歴史上の人物を中心に、高野山の歴史を紹介しています。

また、本館では、高野山奥之院の燈籠堂の特集を開催しています。

主な出陳品

書跡

- 重文 紺紙金字一切経(荒川経)
- 重文 高麗版一切経
- 豊臣秀吉朱印状
- 後陽成院宸筆和歌
- 聾瞽指帰(複製)
- 源頼朝書状(複製)
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 大円院
- 霊宝館
- 霊宝館
- 霊宝館

絵画

- 高野山内絵図
- 嵯峨天皇像
- 後水尾院尊像
- 北条早雲像
- 応其上人像
- 弘法大師像
- 不動明王像
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 高室院
- 蓮華定院
- 金剛峯寺
- 西南院

奥之院 特集



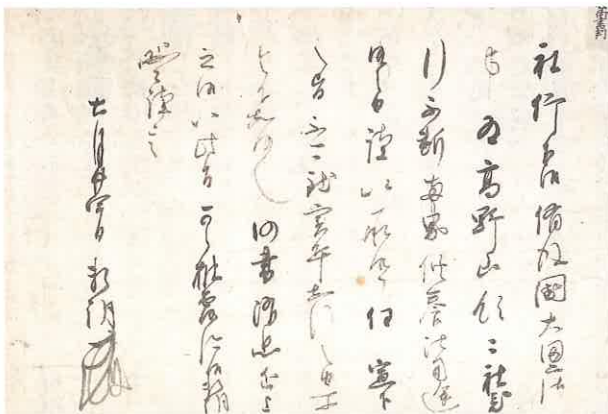
弘法大師十大弟子像のうち真済像



入定弘法大師像



弘法大師像



複製 源頼朝書状 (原本は国宝)

工芸

- 愛染明王像 西南院
- 弘法大師十大弟子像 金剛峯寺
- 入定弘法大師像 金剛峯寺
- 奥之院六祖像 金剛峯寺
- 阿界曼荼羅図 (血曼荼羅図) (複製) 金剛峯寺
- 硯箱并硯石 (伝・弘法大師所持) 竜光院
- 御草履 (伝・弘法大師所持) 金剛峯寺
- 水遊鴛鴦形文鎮 (雄・雌) 金剛峯寺
- 岸上遊亀形筆架 蓮華定院
- 三鈷杵 (伝・行勝上人所持) 宝寿院
- 五鈷杵 (伝・興正菩薩所持) 宝寿院
- 金剛盤 (伝・興正菩薩所持) 宝寿院

※文化財の保存上、予告なしに展示品が変わる場合があります。
常設展示もおこなっております。

収蔵品の紹介 95



興山応其上人像 (金剛峯寺蔵)



応其上人像 (蓮華定院蔵)

応其上人像 一幅

絹本著色 江戸時代 (十七〜十八世紀) 蓮華定院蔵
縦八九〇cm 横三八〇cm

色紙の賛

見しきかし
いはしおもはし
捨し身を

出入いきの
風に
まかせて

慶長六年
九月八日
其 (梵字)

応其上人(木食応其、興山上人とも。一五三六〜一六〇八)は桃山〜江戸時代初期に活躍した僧です。近江国(滋賀県)に生まれ、元々は武士でしたが三十八歳で高野山にて出家し、木食の行(十穀を口にせず、木の実・草の実だけを食べる修行)を行ったことから木食応其と呼ばれます。当時の高野山で勢力のあった学侶や行人には属さず、客僧という身分ながら豊臣秀吉による高野攻めの際には中心となって高野山を救った人物です。その後秀吉から絶大な信頼を得て高野山の堂舎を整備して再興させ、また現在の伊都郡を中心とした各地で土木工事を行い(岩倉池・引の池(橋本市)、畑谷池(かつらぎ町)など多数)、地域の発展に貢献しました。京都でも東寺や方広寺などの造営に関わっています。また連歌にも通じ、連歌の作法書『無言抄』を著したことで知られます。

本像は金剛峯寺蔵「興山応其上人像」の写しとみられ、帽子をつけ、印を結んで数珠を掛けた手は袖に隠し、礼盤上に坐す上人の姿が描かれます。画面上部の「慶長六年(二六〇一)」は金剛峯寺本を写した年紀だと考えられ、制作年代はもう少し新しいようです。金剛峯寺本の上部(色紙)に書かれた歌と年紀、花押(サイン)そして像の向かって左にある梵字「ア」は応其上人自筆とみられ、本像にも梵字と、文字の散らし方は異なりますが同様の賛が記されています。関ヶ原の戦いのうち、上人は高野山を離れ近江の飯道寺に隠遁し、慶長十三年(一六〇八)に亡くなりました。記された歌は、秀吉が没した翌年の慶長四年(一五九九)に詠んだとされ、徳川の世へと移っていく時代の転換期に、高野山を守るために山を離れた上人の心境がうかがえます。なお後年に新調された、本像を収める箱の銘は、高野山霊宝館「放光閣」扁額を揮毫した文人画家・富岡鉄斎(一八三七〜一九二四)が八十七歳の時に記したものです。

(福形安希子)

連載

高野山の古建築
第二十五回 勸学院

鳴海 祥博



勸学院の正面全景 正門の両側には築地塀がめぐり、敷地は嚴重に仕切られている。塀の向こうには鐘樓の姿が見える。



勸学院の正門 四脚門という形式で、獅子の彫刻が飾られ、威厳と風格に満ちている。獅子の鳴き声を「獅子吼(ししく)」といい、仏の説法を意味するという。



本堂の正面全景 中央が本堂で、両側に張り出して「勸使の間」がある。そのため屋根が重なり珍しい姿のお堂となっている。「三棟造り」と呼ばれていた。



本堂の内部全景 二重折り上げ小組格天井や、周囲にだけ敷かれた畳など、堂内は中世の雰囲気色が濃い。左手の板戸の奥に「勸使の間」が見える。

勸学院は壇上伽藍の南東、靈宝館とは道を挟んだ斜め向かいにあります。南に正門の四脚門が建ち、その両側には五本の白い筋の入った築地塀が敷地を取り囲んでいます。門の前には高欄の付いた橋があります。近づいてみると門の扉はぴしやりと閉じられ、中の様子は窺うことができません。この門が開けられるのは一年に一回、勸学会という高野山でも最も大切な修行の法会の時だけです。しかも一般の参詣者は立ち入ることとはできません。そこで今回は特別に許可を頂き、この勸学院を紹介しましょう。

古記録によると勸学院は修行のための場として、鎌倉幕府の執権であった北条時宗が弘安四年(一二八二)に創建したとされています。文保二年(一一三二)には後宇多法皇が勸学院を勸願所とする旨の院宣を出し、この時から勸学会は勸願の法会として現在まで連続と受け継がれているのです。勸学院はこの勸学会のための道場なのです。

記録によると勸学院は、創建以来七回の焼失と再建を繰り返しています。現在の建物は文化六年(一一八〇)に焼失し、文化一〇年(一一八三)に再建されたものです。正面の四脚門を入ると真正面に本堂が建ち、門のすぐ右手には立派な鐘樓があります。この鐘も勸学会の時にだけ打ち鳴らされます。本堂の後ろには「庵室」と呼ばれる付属屋がありますが、他の山内の塔頭寺院にある客殿や台所はありません。それは勸学院がお坊さんの住む住房ではなく、修行の場だからです。本堂の姿は見慣れない珍しい形です。正面三間の本堂の両脇に少し後ろに下がって間口二間の張り出しが付いています。そのため、屋根の上を見ると、中央とその両脇の少し下がった位置の三カ所に三つの棟が並んでいます。古くは「三棟造り」と呼ばれていて、江戸時代前期の絵図でも同じような姿で描かれているところから、古くからこのお堂の特徴だったようです。両脇の張り出しはそれぞれ、畳敷きの一室となっていて、「勸使の間」と呼ばれています。勸学会が勸願の法会であることから、かつては勸使が法会を聴聞したのでしょうか。寺域を区切る西の築地塀には門が一カ所設けられていますが、これは勸使門と称されています。

町石の語り

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一

町石について

町石は「ちようせき」と読むのが一般的ですが、高野山では「ちよういし」と呼んでいます。町石はいわゆる道標的なもので、目的地までの距離が分かるように、主に寺院の参道に一町(約一〇メートル)毎に建てられました。現存最古の石造町石は、大阪府勝尾寺の宝治元年(一二四七)のもですが、木製では平安時代まで遡ることが記録から知られており、高野山では寛治二年(一一八八)まで遡ります。

高野山の町石

高野山の町石は、壇上伽藍を起点に山麓の慈尊院までの一八〇町と奥之院までの三七町のそれぞれで、一町ごとに石柱を建てたものです。町石の研究は、愛甲昇寛先生の大きな業績がありますので、その成果に導かれながら要点を紹介することから始めます。

高野山町石の造立者

塔部分に記載される梵字は、五大の種子でお決まりの短い真言ですが、その直下で角柱の最上部にある梵字は、様々な種類の仏様を表しています。慈尊院側の一八〇本には胎蔵界曼荼羅を構成する仏様一八〇尊、奥之院側は金剛界曼荼羅を構成する三七の仏様を表しています。

高野山の町石は花崗岩製で、一辺三〇センチ程度で、高さ約三メートルの角柱の頂上に、五輪塔を乗せる形にし、根元から五輪塔まで一石で彫成されています。

発願したのは沙門覚敷かくしきという人物で、文永二年(一二六五)に事業が開始しました。その趣旨は、平安時代に不足で木製の標柱が存在したが、朽損するので、各所を勧進して石製に作りかえるというものです。それに賛同する助縁者として、後嵯峨天皇をはじめ、北条時宗、佐々木氏信、大江忠成、安達

今回は町石のなかでも上部に乗る
啗合式五輪塔の町石



五輪塔の梵字と胎蔵界曼荼羅の梵字 (37 町石)

彫成されています。これは高野山町石のすべてに共通する形です(補修を除く)。角柱部分の表面には銘文と梵字が記載され、造営した年号やその願主が記されています。五輪

塔部分に記載される梵字は、五大の種子でお決まりの短い真言ですが、その直下で角柱の最上部にある梵字は、様々な種類の仏様を表しています。慈尊院側の一八〇本には胎蔵界曼荼羅を構成する仏様一八〇尊、奥之院側は金剛界曼荼羅を構成する三七の仏様を表しています。



啗合式五輪塔の町石 (86 町石)

表 高野山町石（壇上加藍～慈尊院）五輪塔の形状

町数	塔形状	町数	塔形状	町数	塔形状	町数	塔形状
1	△	46	○	91	●	136	○
2	△	47	○	92	●	137	△
3	△	48	△	93	●	138	△
4	△	49	○	94	●	139	○
5	△	50	○	95	●	140	△
6	△	51	○	96	●	141	△
7	△	52	○	97	△	142	△
8	△	53	○	98	△	143	●
9	○	54	○	99	●	144	△
10	○	55	●	100	○	145	△
11	△	56	△	101	●	146	○
12	○	57	○	102	●	147	○
13	○	58	○	103	◇	148	○
14	○	59	●	104	△	149	●
15	△	60	○	105	○	150	△
16	○	61	○	106	○	151	○
17	△	62	○	107	○	152	●
18	○	63	○	108	○	153	●
19	△	64	○	109	●	154	△
20	○	65	○	110	○	155	●
21	○	66	○	111	○	156	△
22	△	67	●	112	◇	157	△
23	○	68	◇	113	◇	158	○
24	△	69	●	114	●	159	○
25	○	70	△	115	○	160	○
26	○	71	○	116	○	161	○
27	○	72	△	117	△	162	○
28	○	73	△	118	△	163	○
29	○	74	○	119	○	164	○
30	△	75	○	120	○	165	○
31	○	76	○	121	○	166	○
32	△	77	△	122	○	167	○
33	○	78	○	123	○	168	○
34	△	79	○	124	○	169	○
35	○	80	●	125	○	170	○
36	○	81	△	126	○	171	○
37	○	82	●	127	○	172	○
38	○	83	△	128	●	173	○
39	△	84	●	129	○	174	○
40	◇	85	◇	130	○	175	○
41	△	86	●	131	△	176	○
42	△	87	●	132	△	177	○
43	○	88	◇	133	○	178	○
44	△	89	◇	134	●	179	○
45	○	90	●	135	○	180	○

里数	塔形状	里数	塔形状
01	●	03	●
02	●	04	●

- 当初（囀合式）
- 当初（普通型式）
- △ 後補
- ◇ 未確認



囀合式五輪塔の町石（86町石）



3里石と72町石の並立風景

五輪塔の形に注目してみましよう。前回ご紹介した囀合式五輪塔は砂岩製のものが中心でしたが、花崗岩製の町石にも数多く残されています。

全部がこの囀合式五輪塔ではなく、他にも何種類かの五輪塔が採用されています。では囀合式五輪塔は、どのような

分布をしているのでしょうか。完全に調べきつた訳ではないのですが、表のとおり囀合式五輪塔が採用される部分に特徴的な傾向がみられます。まず八〇町石から一〇〇町石までの間の多くが該当するということが、一里毎に建てられる里石のすべてでも採用されているということ、他は散在的に存在しますが逆に一町から七九町の大半は別タイプの五輪塔が採用されているということ、などです。つまり、複数の石工集団によって町石が造営されただけでなく、請け負う形式に何らかのパターンが存在したのではないかとということです。銘文と対比しても施主との関係

性は薄いようなので、どうやら陣頭指揮を執っていた人物の指示で、決まった区間を請け負うような分業制だったのではないかと考えられます。銘文の判読を通じた研究は、愛甲先生の業績で大きく進みましたが、五輪塔や石柱の形を題材とした考古学的な研究はこれからです。時間がかかるでしょうが、解明される事実もまた、たくさんあると期待されます。

【参考文献】
愛甲昇寛一九七三『高野山町石の研究』密教文化研究所
狭川真一二〇〇五『囀合式五輪塔考』
『目引』第六号 石造物研究会

「古絵図で巡る高野山探訪」

(その三)

金剛峯寺—真然大徳廟
壇上伽藍—智泉大徳廟

『高野山壇上并寺中絵図』(宝永三年(一七〇六) 金剛峯寺 以下、『絵図』と言います。)(図1)を見ると、

金剛峯寺の北側の丘陵の斜面、すなわち旧青巖寺の境内の裏手には、弘法大師空海の弟子の真然大徳(八〇四—八九二)(図2)の御廟があります(以下、『真然廟』とい

ます。)(図3)。真然は、空海の母方の甥にあたり、九歳で出家、空海に師事しました。

平成二十七年(二〇一五)は、空海が弘仁七年(八一六)高野山を開

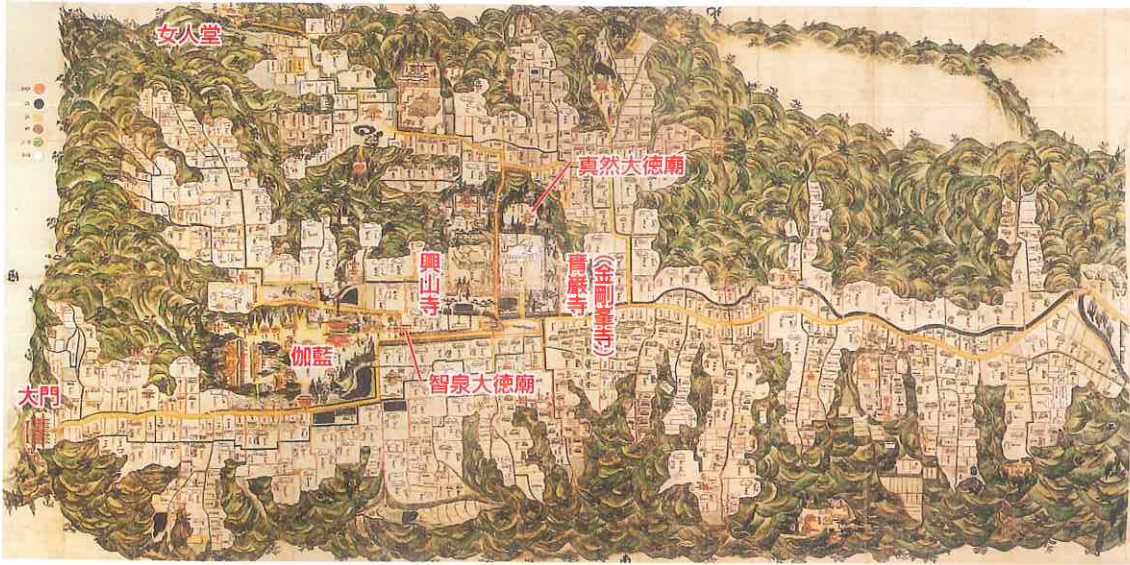


図1 『高野山壇上并寺中絵図』(宝永3年(1706) 金剛峯寺)



図2 真然像(「弘法大師十大弟子」のうち。江戸時代)



図3 金剛峯寺境内にある「真然大徳廟」



図4 智泉像(「弘法大師十大弟子」のうち。江戸時代)

しいかな、ああかなしいかな、かな
 『靈集』には「かなしいかな、かな
 しいかな、ああかなしいかな」と、

創し、千二百年目の記念すべき年に
 あたることから、「高野山開創
 千二百年記念大法会」が執り行われ
 ました。空海は少年期に高野の地を
 訪れていましたが、修禪の道場とな
 るにあたり、再び地主神の高野両明
 神に導かれて高野の地に到り、その
 後嵯峨天皇に高野の地を下賜されま
 した。当時、空海は真言宗を開宗し、
 平安京の東寺(教王護国寺)や神護
 寺を拠点に活動をし、多忙な日々を
 過ごしていました。そこで、平安京
 より、遠方の高野の地の開創を弟子
 の真然に託しました。

当初、空海は高野山の開創は甥の
 智泉(七八九―八二五)(図4)に
 託す予定でしたが、三十六歳で入寂
 しました。空海の書簡を集めた『性
 霊集』には「かなしいかな、かな
 しいかな、ああかなしいかな」と、
 その当時の心情を綴った言葉が収載
 されており、智泉との惜別深く落
 胆する空海の心情が読み取れます。
 『絵図』には、智泉大徳廟(以下、
 『智泉廟』といえます。)も描かれて
 おり(図5)、現在も伽藍東塔の東
 側(向かって右側)に佇んでいます
 (図6)。

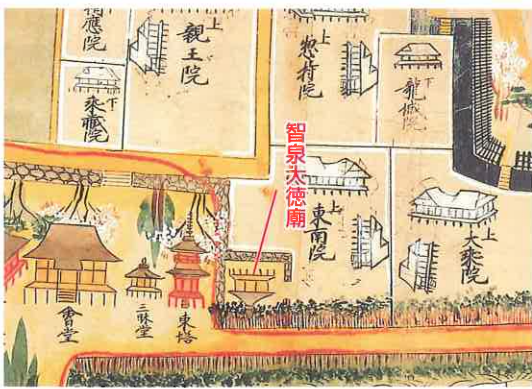


図5 同『絵図』(「智泉大徳廟」の部分)

その後、智泉の遺志を継ぎ、弘法
 大師空海の信任を得て、真然に高野
 山開創の任が託されました。真然廟
 の建物は、昭和六十三年(一九八八)
 から平成元年(一九八九)にかけて
 解体修理が行われ、併せてこの場所
 が史跡金剛峯寺境内に位置すること
 から、建物下の埋蔵文化財の発掘調
 査が昭和六十三年に行われました。
 発掘調査が行われた当時、現在の



図6 伽藍の東塔の東側の林に佇む「智泉大徳廟」

「真然廟」は「真然堂」と呼ばれ、
 御霊を祀っていることから、「廟」
 ではなく、「堂」と認識され、真然
 の遺骨などが埋葬されているかは長
 い歳月を経て不明であったよう
 です。
 また、同『絵図』を見ると、「真
 然堂」の西側(向かって左側)の敷
 地には「塔屋敷」と記されています
 が(図7)、現在この場所には、護
 摩堂が建っています。
 『紀伊続風土記』(文化三年
 一八〇六刊行)によると、現在
 の金剛峯寺の前身の青巖寺が建立さ
 れる、さらに以前に存在した大伝法
 院が建立されるにあたり、当初の真
 然廟は現在の真然廟の場所に再葬し
 たことが記されています。つまり、



図7 同『絵図』(「真然大徳廟」と塔屋敷の部分)

青巖寺は、覚鑿上人(一〇九一
 一一五三)により大伝法院が今の岩
 出市の根来寺の場所に移動した跡地
 に建立されたとのこと。
 現在の「真然廟」は、宝形造の「仏
 堂」ですが、発掘調査や史料調査の
 結果、四期に亘る変遷があることが
 分かりました。(図8・9)
 A期は、寛平三年(八九一)に建
 立され、「墳墓」、すなわち墓は土が
 盛られ土饅頭のような形式であつた
 と考えられます。B期は、天承元年
 (一一三二)に覚鑿が大伝法院を建
 立するにあたり、墳墓を「聖霊堂」
 という、「多宝塔」として整備され
 た時期で、その際にA期の墳墓の墓

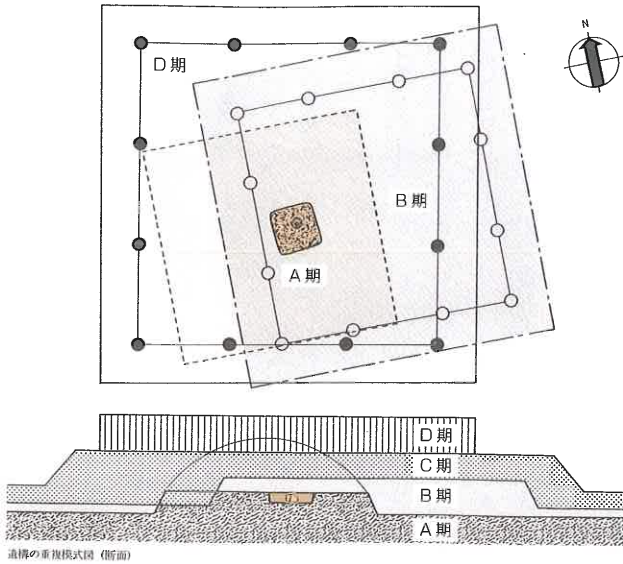


図8 「真然大徳廟」の遺構の重複平面模式図・遺構の断面模式図

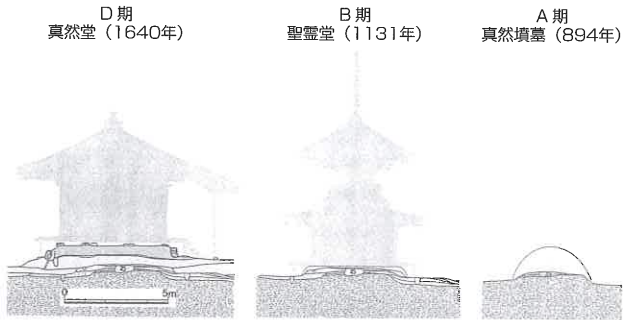


図9 「真然大徳廟」の上部構造物の変遷



図10 「真然大徳廟」の発掘調査で出土した蔵骨器・猿投焼の緑釉四足壺出土状況



図11 真然大徳の蔵骨器・猿投焼の緑釉四足壺

壙から蔵骨器を取り出し、この多宝塔の下に再葬されました。C期は、十四世紀代にB期の基壇の上に、さらに盛土をして塔(多宝塔か)が再建された時期ですが、詳細な遺構平面の位置は不明です。その後、この塔は火災により焼失しました。D期は、寛永十七年(一六四〇)に宝形造の「仏堂」として再建され、現在の真然廟の建物となっています。

つまり、古絵図に記述のある「塔屋敷」の地名は、かつて西側(向かって左側)の場所に、真然廟が「多宝塔」であったB期からC期にかけての時期の名残を示していると考えられます。また、この「塔屋敷」は「真然廟」の塔の監理などを行ったと考えられる附属建物が存在したことを示し、重要な建物として認識されていたことが窺えます。

また、発掘調査では建物の基壇の中央部から鉄板、その下部には現在の現在の愛知県で焼かれた猿投焼の緑釉四足壺が蔵骨器として埋納されていることがわかりました(図10)。四足壺は蓋付で、さらに蓋を開けると内部には火葬された骨が納められていることが確認されました。このような四足壺は、一般的な集落遺跡などで出土するものではなく、また

同規格の類例がないことから特注品と考えられます。以上のことから、この壺に納められた火葬骨はかなり特別な人物、真然のものに間違いなくと考えるにいたりました(図11)。発掘調査の結果により、この場所に建立された建物は御霊のみを祀る「仏堂」ではなく、真然の骨が正にこの場所に眠る「御廟」であるということから、「真然大徳廟」と呼ばれるようになりました。

奥之院弘法大師御廟に訪れる参拝者や観光客の方は後を絶たないですが、改めて、真然廟と智泉廟を訪れたいかがでしょうか。

空海と、空海を慕い、高野山の地で眠る二人の祖師、智泉大徳と真然大徳の存在なくして、高野山の開創が実現しなかったというドラマチックな歴史に感慨深く浸ることができません。

また同時に、先徳の並々ならぬ偉業を思うと、今日まで守り伝えられた高野山の文化財、そしてこれらを次世代に守り継ぐことの大切さを考えずにはいられません。高野山の町のいたるところには、そのような空海や先徳らの想いが込められた史跡や文化財が満ち溢れています。

(鳥羽正剛)

高野山靈宝館からのお知らせ

イベント報告

◎ミュージアム法話

・10月29日(土)

吉井榮勇師(兵庫・榮潤寺)

・11月23日(水)・祝

今村祐恵師(京都・縁城寺)

文化財として展示している彫刻や絵画の仏像を、お坊さんの法話を通じて、解説しました。普段よく靈宝館に来館される方も、違った角度から仏像を見ることができたとの反響もあり、大変好評でした。

◎博学連携事業

文化財ふれあい体験事業

国宝不動堂と御影堂の下座行&解説見学&消火栓施設体験事業

博学連携事業とは、博物館と学校が共同で事業を推進し、若い世代の人達に歴史を学ぶこと、文化財を後世に守り伝える大切さを知り、高野山に対する深い教養、愛着を身につけてもらう試みです。

高野山高等学校では毎月、弘法大師空海の報恩日である21日に山内各所の建物などの清掃奉仕(下座行)を行っています。今回平成28年10月21日(金)、伽藍にある国宝不動堂の建築や安置されている仏像について当館学芸員が解説を行い、下座行を行いました。その後、国宝不動堂と御影堂に設置されているドレンチャー

や放水銃を実際に稼働してもらい、文化財への防火意識を高めてもらいました。参加した生徒は「自分たちの住んでいる高野山にこのような貴重な文化財があることを知り、また文化財を守る大変さを知りました。」といった感想が寄せられました。

◎高野山靈宝館友の会文化講座

「知られざる高野山!!」

「心院谷を歩く」

高野山靈宝館友の会では、平成28年11月20日(日)、会員様を対象とした文化講座を開催しました。当日は約30名もの方々にご参加いただき、山陰加春夫副館長、木下浩良高野山大学図書館課長の講師のもと、不動堂、金輪塔、明恵上人供養塔、源家三代の墓、真田家墓所を見学しました。参加者からは「今まで行ったこと



真田家墓所(蓮華定院)見学

のないところに行くことができ、よかった」「次回も是非参加したい」と、大変好評でした。今後も高野山靈宝館友の会文化講座にご期待ください。

◎春期企画展

「霊場高野山―納骨信仰の世界」

《日時》

平成29年4月15日(土)～7月9日(日)

前期…4月15日(土)～5月28日(日)

後期…5月30日(火)～7月9日(日)

高野山は、弘法大師空海により開創され、1200年の歴史を有します。今回の展示では、高野山の納骨信仰の歴史に焦点を当て、関連する文化財を通じて、高野山の過去から現

在への信仰の移り変わりを辿ります。
主な出陳品…

重文 高野山奥之院出土品(比丘尼

法薬経塚出土品・御廟及び周

辺出土品・灯籠堂及び周辺出

土品) 金剛峯寺

重文 金銅宝篋印塔(南保又二郎納

骨遺品) 金剛峯寺

阿弥陀聖衆来迎図(複製) 金剛峯寺

両界曼荼羅図(血曼荼羅・複

製) 金剛峯寺

位牌(寺位牌) 蓮華定院

位牌(寺位牌) 親王院

一石五輪塔 金剛峯寺

一石五輪塔 明王院

木製五輪塔 元興寺(奈良市)

高野山蓮華曼荼羅図 報恩院

◎靈宝館友の会会員の募集

高野山靈宝館では、「友の会」の会員募集を行っております。

拝観時に会員証を受付窓口でご提示いただくと、会員本人のほか同伴者3名様まで無料で入館できます。

また靈宝館や高野山の文化財の情報掲載した機関紙「靈宝館だより」を年4回(予定)お届けし、また友の会会員を対象とした靈宝館事業に優先的ご参加いただけます。

在への信仰の移り変わりを辿ります。

主な出陳品…

重文 高野山奥之院出土品(比丘尼

法薬経塚出土品・御廟及び周

辺出土品・灯籠堂及び周辺出

土品) 金剛峯寺

重文 金銅宝篋印塔(南保又二郎納

骨遺品) 金剛峯寺

阿弥陀聖衆来迎図(複製) 金剛峯寺

両界曼荼羅図(血曼荼羅・複

製) 金剛峯寺

位牌(寺位牌) 蓮華定院

位牌(寺位牌) 親王院

一石五輪塔 金剛峯寺

一石五輪塔 明王院

木製五輪塔 元興寺(奈良市)

高野山蓮華曼荼羅図 報恩院

す。さらに、伽藍の御供所で会員

証をご提示いただきますと金堂と

大塔の内拝が無料となります。皆様のご入会をお待ちいたしております。

《年会費》

一般会員(個人) 3,000円

賛助会員(法人) 30,000円

《お問い合わせ先・申込先》

高野山靈宝館 靈宝館友の会係

(電話0736-56-2029)

お問い合わせ先 高野山靈宝館 TEL 0736-56-2029(代)

霊宝館の庭園

ヒメコウゾ・姫楮、カジノキ・構、コウゾ・楮

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

ヒメコウゾはクワ科・カジノキ属の落葉低木です。本州(岩手県以南)・四国・九州・朝鮮・中国中南部に自生しているそうです。

「小川植物コレクション標本目録」・和歌山県立自然博物館・二〇〇四年発行には高野山の摩尼山、大門に近い町石道、高野町内、



ヒメコウゾの葉枝と果実



コウゾの樹皮

高野山塊を源の一つとする有田川流域の有田郡清水町(現有田川町清水)、貴志川流域の海草郡美里町・野上町(現紀美野町)などで採取されたものも記載されています。

ヒメコウゾの属するカジノキ属は以前はコウゾ属とされていました。カジノキ属ではヒメコウゾ(姫

楮)、ツルコウゾ(蔓楮)、カジノキ(構・穀・梶)の三種と雑種のコウゾ(楮)が知られています。

カジノキはマレーシア、インドシナ、中国の中南部に自生する落葉高木、栽植もされ樹皮の繊維で布が織られている(いた)といえます。わが国には縄文時代に、すでに渡来していたという説もあります。

コウゾはヒメコウゾとカジノキの自然交配による雑種で、カジノキに近い形質をもつ個体、ヒメコウゾに近い形質をもつもの、中間の形質をもつ個体があります。

これらの二種一雑種の共通点の一つは樹皮の内皮(白皮)の繊維を和紙の原料とされてきたことです。ヒメコウゾとコウゾによる和紙を楮紙(ちよし・こうぞがみ)、カジノキを用いて漉かれた和紙を構紙(かじがみ)・穀紙(こくし)と呼び書かれています。

これらの内皮の繊維には和紙の原

料として、それぞれ長所欠点があり、上質のものをはじめ色々な種類(用途)の紙がつくりやすいことによりコウゾの栽培が各地で行われるようになったと言えます。

紀ノ川の小支流での高野紙(細川紙・古沢紙・河根紙)、有田川流域の保田紙なども楮紙です。

貴志川流域では国道沿い民家の近く、田畑や田畑であった所の縁などにコウゾが多く見られます。

この流域での和紙に関しては、かつて高野山の寺領であった神野庄(現紀美野町下神野・上神野と呼ばれている地域)の「神野紙」という楮紙について「紀伊続風土記」や「紀伊国名所図会」などに記載されていますが、いつの頃から途絶えたのでしょうか。が、地域で楮紙づくりを計画、準備している人はいます。

地域活性化の一策、持続可能な植物の利用という点からも、その成功を願っているところです。